

九州北部豪雨

○ 県南山間部を襲った未曾有の災害
平成29年度

人的被害35人、家屋1,400件以上、朝倉市に過去最大級の被害を与えた2年前の「九州北部豪雨」。朝倉市街と東峰村の間に位置する、朝倉市の山間部・松末地区を襲った災害の恐怖と、復興を目指す地域の声をお伝えします。

朝倉市松末地区 24時間の実録

7/5

この1時間の雨量は史上最高の137mmを記録。迫る濁流と土砂に、家屋や車がなすすべ無く流された。

○ 午後5時～6時 観測史上最多の雨量

○ 午後3時40分 届かなかった無線放送

伊藤会長は地区全域へ防災無線で避難を呼びかけ。しかし送信所は故障しており、無情にもその声は届いていなかった。

○ 午前12時過ぎ パラパラと降雨

○ 午前10時15分 不安のよぎる朝

市全体のJアラートのテストに合わせ、松末地区では自主的に避難訓練を予定していた。しかし連絡の無いままテストは中止。伊藤会長は連絡体制に不安を感じていた。

全てを飲み込んだ濁流
6割の人が去っていった

「雨が過ぎ去ったとき、どこが自分の家か分からない。流れ込んだ土砂や流木で全てを失った人もいる。山間部における国内最大の災害ではないだろうか」2年が過ぎた今も残る災害の爪跡を、朝倉市の住民組織「松末地域コミュニティ協議会」の伊藤睦人会長は静かに見つめました。勾配のきつい谷間にある松末地区では、付近を流れる赤谷川と乙石川が氾濫。集落には大量の土砂と流木が流れ込み5、6m堆積するなど、最も大きな被害を受けた地区の一つです。災害前、地区には約250世帯が暮らしていましたが、今は約40%の100世帯にまで減少。「家屋被害がなくても、裏山の崩壊を恐れて避難を続ける人もいます。生活再建を目指しても、農業をできる土地や道具が全て流され、やむなく長年続けた稼業を捨て、都市部に転職した人も大勢いる。時間がかかるほど、地元を去る人が増えるのではないかと伊藤会長は危機感をにじませました。

「家族、家、大切なもの、多くが失われた。被災して2年間は苦悩の連続でした。しかし、どんなにつらくても災害を経験した者としての責任がある。ここで起きた悲劇を繰り返さないために、災害から得た教訓を伝え続けたい」と力を込めました。



松末地域コミュニティ協議会
伊藤睦人 会長

想定を越える災害の恐怖
「からぶり」でも早期避難を

「平成24年にも豪雨を経験しましたが、一部地区が孤立するなど危機はあったものの、人的被害が無かった。『今回も大丈夫』、その根拠の無い自信が私たちの判断を誤らせたのかもしれない」と伊藤会長は振り返ります。「一生」一度の大雨と呼ばれる平成24年の1時間最大降水量は約60mm。しかし平成29年は約130mmにも及びました。「想定外を想定すること。準備に上限はありません。早期の避難が『からぶり』になっても、それで良かったと思える意識が大切です」。

災害時には住民の安否確認を行い、松末小学校への避難を主導。被災後は避難所で住民の困りごとを市に伝えるなど奔走し続けた伊藤会長。行政との意見交換会を企画するなど、情報共有に腐心してきました。「将来の展望を知ることが希望になる。住民の思いが反映された復興を実現し、住みやすい地域を取り戻したい」と前を向きまします。災害から2年、全住民の願う復興への道のりは今も続いています。



↑ 震災後、松末地区の乙石地域では地域住民がインターネットで寄付を募り実現したこのぼりが掲げられ、2年目を迎えた。

○ 午後6時 松末小学校へ

会長の電話に「自宅に土砂が流れ込んでいる」と妻からの連絡。帰宅しようとしたが、土砂崩れや氾濫に恐怖を感じて帰宅を断念。警察官に促され、松末小学校へと避難した。



○ 日没後 眠れない夜

松末小学校の避難者は約50人。建物の2階まで迫る水に、不安と恐怖を感じながら、励まし合い、一晩を明かした。

○ 午前10時 決意の避難

極度の緊張から限界を迎えた子どもたちのため、伊藤会長は学校からの移動を決断。より安全な避難所へ向かうバスを目指し、崩落した道を徒歩で進んだ。

○ 翌朝 雨脚が弱まる

嵐が過ぎて

自分の家が分からないほどの甚大な被害。「空爆の跡のようだ」と言われたほど田園風景は一変し、変わり果てた古里の姿に、住民は立ち尽くした。松末の奥地、乙石地区では家屋が流され、尊い命が失われた。



昨年の教訓糧に 福智町ハザードマップ更新

昨年福智町を襲った豪雨を受けて、ハザードマップを一新しました。被害の実情をもとに、より正確な危険箇所が掲載されています。この地図は避難における大きな指針の一つですが、危険とされている箇所以外でも警戒を怠らず、早めの避難を心がけましょう。新しいハザードマップは今月号の折り込みか、町公式ホームページからご確認ください。→



写真提供：西日本新聞社



写真提供：西日本新聞社